

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

烈士陵园の景観：南部と北部の記念碑の比較から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2017-12-25 キーワード: 作成者: 高山, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008630

烈士陵园の景観 — 南部と北部の記念碑の比較から

高山 陽子
亜細亜大学

本稿では中国と南部と北部の烈士陵园の記念碑の比較を通して、烈士陵园の景観がどのように資源化されていったかを考察する。烈士陵园とは中国の革命犠牲者である烈士を祀る公共墓地である。最初の烈士陵园の黄花崗烈士墓苑のように、1920年代から30年代の烈士墓や記念碑には過剰に西洋的な様式のものが見られるが、北部では旅順烈士陵园やハルビン烈士陵园のようにソ連の影響を強く受けていることが特徴である。1990年代から愛国主義教育が本格的に広がるとともに、烈士陵园や記念館は愛国主義教育基地として大規模な改修工事が行われた。建物は大きく立派になると同時にパノラマやジオラマ、巨大スクリーンの映像など、テーマパーク風になりつつある。こうした烈士施設の大衆化に対して、中国政府は烈士褒揚条例（2011年）や烈士公祭弁法（2014年）を通して式典の厳格化を行っている。烈士記念日には、普段は誰も来ない烈士陵园の景観が一変し、政治的イベントのために聖なる空間という意味が引き出される。政治的に聖なる空間において重要なことは、誰か記念碑や墓に対して献花するかであり、現在ではテレビや新聞、インターネットを通して献花の様子が広く報道されている。こうして烈士陵园は現代の儀礼を通して景観の意味や社会的意義が再確認される中で資源化されるのである。

1 はじめに — 国民的記念碑

近代国民国家の誕生と国民的英雄顕彰の記念碑の誕生はほとんど同時期であった。ワートルローの戦い以後、ワートルローの丘にはライオンの記念碑が建てられ、戦死者を追悼するイギリス人たちをひきつけた。こうした近代的記念碑は、特に第一次世界大戦後に急増し、戦死者は一個人の死から国家のために犠牲になった集合的な死へと変換させられた。無名兵士の墓は国民的な聖地となり、国によっては常に衛兵に守られる重要な空間となった。

中国の烈士陵园も英雄顕彰施設の一つであり、戦死者を革命のために命を落とした烈士として祀る場所である。烈士陵园の設立には、烈士という身分の誕生と公共墓地建設を含む葬儀の近代化が必要であった。伝統的に墓を中心とする祖先祭祀を重視してきた中国では、1928年の第六軍団第十二軍軍長の孫殿英（1889-1947）による清東陵の盗掘

事件は祖先を冒瀆する行為として社会的・文化的に許されないものと見なされたように、墓は極めて重要な存在であった。一方で、葬儀から埋葬までの一連の儀礼にかかる高額な費用や、墓地建設のための用地の不足などは、近代化が進む当時の中国では深刻な問題であった。こうして、1925年に政権を掌握した国民政府は1928年10月、「公共墓地に関する条例」において共同墓地の場所や区画、管理について定めた。そして、革命の犠牲者を烈士として正式に祀る条例を整備していった。1936年、烈士褒揚のための忠烈祠の建設が定められた。

1949年に誕生した人民政府もまた、烈士顕彰のための施設を作ることと同時に、伝統的祖先祭祀を迷信として退け、合理的な葬儀を行うことを進めた。人民政府は、1950年代から火葬を奨励し、1985年2月8日、「殯葬管理に関する國務院の臨時規定」（國務院関于殯葬管理暫行規定）を公布し、さらにこれを1997年7月11日の「葬儀管理条例」（殯葬管理条例）で改めた。それとともに、元首の国葬と烈士の追悼会を形式化することも必要であった。烈士の追悼会の様式が形成される過程で、烈士の意味や公的な身分が固まり、烈士の活躍が語られるようになっていった。中国では位牌を通して祖先と対峙してきたが、西洋的な記念碑が導入されると、記念碑に献花する形で烈士という国民的な祖先を祀るようになった。当然、「烈属」と呼ばれる烈士の遺族は個人的に死者を追悼するが、その行為は新聞やテレビで報道され、もはや個人的な行為とはいえない。

1990年代後半に本格的に始まる愛国主義教育では、烈士陵園や烈士記念館など烈士と関わりのある施設が愛国主義教育基地と認定され、2000年代後半に広まる「紅色旅游」ではそれらの施設を訪れることが政治的にも商業的にも正しい行為となった。こうした流れの中で半世紀前あるいは四半世紀前に建てられた烈士陵園の改修工事が進み2011年「烈士褒揚条例」、2014年「烈士公祭弁法」が施行され、烈士の概念を明確にし、公的に祀る準備が進められた。「烈士公祭弁法」によると、式典は主催者による記念碑（塔）への敬礼および献花に始まり、国家斉唱、中国少年先鋒隊（6歳から13歳までの児童による中国共産主義青年団の組織）の隊歌「我々共産主義の後継者」の斉唱、「献花の曲」の演奏と献花、緞帯（赤地に黄色で「人民英雄永垂不朽」と書かれた花輪にかけるリボン）を整えて終わる。さらに、式典は、清明節と国慶節、その他の重要な記念日に烈士記念施設、烈士記念碑や烈士の墓において行うことなども定められた。烈士の墓は約98万9千基、烈士の数は2,000万人に及ぶとされ、現在でも烈士のデータベース化および全国に2万9千ほどある烈士関連施設の整理作業が行われている。

最初の「烈士記念日」となった2014年9月30日、習近平国家主席らは天安門の人民英雄記念碑に献花した。その他、中国各地の烈士記念碑や烈士陵園において烈士記念式典が行われた9月30日という日付は、1949年に天安門広場の人民英雄記念碑の定礎式が行われたことに由来する。一連の烈士顕彰式典の制定は、1990年代に強化された愛国主義教育との連続性の上で理解することもできるが、「烈士公祭弁法」の制定に際して各メデ



写真1 セノタフ (2015年9月, 筆者撮影)。



写真2 ノイエヴァッヘ (2007年9月, 筆者撮影)。

イアはイギリスの戦没者記念日(11月11日)やドイツの国民哀悼日(11月第3日曜)などに言及しており、単純に愛国主義のみから分析することはできない。ロンドンのセノタフ(写真1)やベルリンのノイエヴァッヘ(写真2)は非宗教性を意識した施設で、人民英雄記念碑もこうした点において大きな影響を受けている。他方、緞帯における「人民英雄永垂不朽」という文字を揮毫し、窮礼、清明節の烈士の墓参りという点では伝統への回帰が見られる。

実は、伝統的な祖先祭祀である清明節の本格的な復活は2008年に始まる。新年、春節、労働節、国慶節という1949年以来の祝日に加えて、2008年から清明節と端午節、中秋節が祝日となった。端午節や清明節といった年中行事の復活は、中国政府がこうした伝統文化を「国家の凝集に資するロジックのひとつとして取り込んでいこうとする意図」[川口 2013: 9]の表れである。社会主義的近代化の過程で祖先祭祀を含む宗教儀礼は否定され、芝生の中に墓石が並び、オベリスクのような記念碑がそびえる烈士陵園という新しい景観を作り出し、墓地や葬儀の非宗教化が進められてきたが、近年、烈士の祭祀方法が伝統的な色彩を濃くしているのは興味深い現象である。

以上の点を踏まえ、本稿では、烈士陵園の成立過程を通して記念碑のある景観が現代中国にどのように定着したかを考察する。

2 民国期の烈士陵園—烈士の位置づけ

2.1 烈士陵園の様式

烈士の本来の意味は「信念をもって行動する男子」である。例えば、曹操は「歩出夏門行」の一節に「烈士暮年 壯心不已」(男子は年老いたとしても、熱い気持ちは止められない)と詠んだ。日本では江戸後期の儒学者、猪飼敬所(1761-1845)が「烈士暮年 壯心不已」の文字を残したように儒学の言葉として定着し、1864年の天狗党の乱後、処刑された水戸藩の攘夷派の武田耕雲斎(1803-1865)や藤田小四郎(1842-1865)らは、

明治以降、「水戸烈士」と呼ばれた。同年、禁門の変で戦いに敗れ、天王山で自害した真木和泉守ら17名は後に「十七烈士」として祀られた。他方、英霊という語は、水戸では弘道館を設立した藤田東湖（1806-1855）が「和文天祥正気歌」で「乃知人雖亡 英霊未嘗泯」（それを正気と知る人が死んでも英霊が減んだことはない）と詠んだことで明治期の日本に定着した。「正気歌」は宋の遺臣、文天祥がフビライに幽閉されていたときに詠んだものである。文天祥はフビライへの帰順を幾度も要請されたものの、最後まで宋への忠心を貫き、最後には刑死した。

このように烈士は漢詩の中の称号のようなものであった。最初に近代中国で用いられたときも死後の称号であった。最初に烈士の称号が付与されたのは譚嗣同（1865-1898）であった。1898年、光緒帝は康有為（1858-1927）や梁啓超（1873-1929）、譚嗣同らの若手の官僚を登用し、科挙の改革や京師大学堂の設置などの改革を行い、改革の抵抗勢力である西太后を捕らえようとしたものの、袁世凱の裏切りで失敗し、反対に幽閉された。康有為と梁啓超は日本へ亡命したが、譚嗣同は処刑された。梁啓超は横浜で1898年12月、『清議報』を創刊し、その中で譚嗣同を烈士として追悼した。さらに梁啓超は翌年、譚嗣同のほかの犠牲者5名を含めた「殉難六烈士」を追悼する文章を『清議報』に掲載した〔吉澤 2003: 159-164〕。

その後、1900年の義和団事件で自立軍の蜂起に失敗し刑死した唐才常（1867-1900）、日本留学中、1905年、大森海岸で死亡した陳天華（1875-1905）や1907年、紹興の蜂起に失敗し処刑された徐錫麟（1873-1907）や秋瑾（1875-1907）、安慶の蜂起で処刑された熊成基（1887-1910）なども烈士と呼ばれた。ただし、辛亥革命前の殉死者は公的には反逆者であったため、に公的に烈士として追悼されることはなく、公的には反逆者というレッテルが貼られた。武昌蜂起前日の1911年10月9日に斬首された彭楚藩（1884-1911）、楊洪勝（1875-1911）、劉復基（1885-1911）の3名は死後、「辛亥首義三烈士」、「開国烈士」と称された。

ようやく革命の犠牲者が烈士として埋葬されたのは黄花岗起義の後であった。黄花岗蜂起は、1911年4月27日（旧暦3月29日）、中国同盟会が広州で起こした武装蜂起である。犠牲者72名（後に86名と判明）が埋葬された当時、は記念碑などの建造物はなかったが、辛亥革命後、革命党の潘達微（1881-1929）は墓苑を作ることを計画し、1921年に黄花岗墓苑を完成させた（写真3）。黄花岗墓苑には年々、墓や記念碑が増設され、「聖なる空間」と見なされていた。その中心となるのは七十二烈士墓と紀功坊である。自由の女神像を持つ紀功坊は、72のブロック状の石からなる記念碑で、その石の裏側には献金者の名前が刻まれた（写真4）。門には「浩気長存」（浩然の気は永遠に不滅である）の文字が掲げられた。

黄花岗墓苑は追悼施設として整備され、旧暦3月29日には毎年追悼大会が開かれていたものの、黄花岗蜂起の記念日は1925年まで公式な記念日には認められなかった。辛亥



写真3 黄花岗烈士陵园入口（2014年8月，筆者撮影）。



写真4 七十二烈士墓（2014年8月，筆者撮影）。

革命後、民国政府は西洋諸国にならって記念日を定める作業に取り掛かった。武昌蜂起の10月10日はとりわけ重要な祝日であることから「国慶日」となったが、黄花岗蜂起や安慶蜂起などは烈士追悼の意味合いが強く、アメリカ独立記念日やフランス革命記念日における共和の祝祭には適していないとして記念日にはならなかった【小野寺 2011: 87-106】。烈士追悼は、儒教的な祖先祭祀の要素と、新国家成立の賞揚という要素を持ち続け、烈士陵园においては、碑文などの文字を通した伝統的な偉人顕彰と、西洋から導入された公園墓地、彫像やレリーフなどの造形芸術を通した英雄顕彰が融合していった。

租界や租借地があり西洋文化に触れる頻度が高く、また欧米への留学経験のある人々も多かった上海や広州では過剰ともいえる西洋風の記念碑が建てられた。その例は、黄花岗の自由の女神像や十九路軍淞滬抗日陣亡將士墳園の記念碑群である。記念碑の一つである凱旋門（1932年竣工）には、正面に林森（1867-1943）による「十九路軍抗日陣亡將士墳園」、裏側に宋子文（1894-1971）による「厚い忠誠心」（碧血丹心）という題字が刻まれた（写真5）。凱旋門に扁額を掛けるのは中国的な特徴である。西洋の凱旋門の場合、一般的に外側はレリーフで装飾し、内側に殉死者の名前を刻む。パリのエトワール凱旋門はその下に第一次世界大戦以降の無名兵士の墓と「永遠の炎」があり、神聖な場所と見なされている。なお、十九路軍淞滬抗日陣亡將士墳園は、1932年1月28日に勃発した第一次上海事変の犠牲者を祀るものである。上海事変の犠牲者を祀る記念碑は1934年、杭州にも建てられた。設計したのはフランス留学経験のある劉開渠（1904-1993）で、「淞滬戦役国軍第八十八師陣亡將士紀念碑」と名付けられた。1960年代に破壊された記念碑は、2003年に再建された（写真6）。

1925年5月30日に上海で起こった五卅運動の記念碑も西洋的な様式であった。1925年、上海の日系紡績工場で働く労働者たちが賃上げや解雇者の復職を求めて起こしたストライキに対して、日本は徹底して弾圧し、5月に従業員の一を射殺した。学生を中心とした抗議運動は反帝国主義運動に拡大し、5月30日、打倒帝国主義と経済絶交を掲げたデモ行進が行われた。デモ隊に向かってイギリス警察が発砲し、何秉彝や尹景伊などの



写真5 凱旋門 (2014年8月, 筆者撮影)。



写真6 淞滬戦役国軍第八十八師陣亡将士紀念碑 (2011年3月, 筆者撮影)。

学生を含む13名が死亡し、数十名が逮捕された。6月30日、上海の西門の公共体育館において五卅烈士の追悼会は午後2時10分に始まった。5分間、鐘が鳴った後、上海の実業家の鄒志豪が、何秉彝や尹景伊、陳虞欽、唐良生、石松盛、陳兆長、朱和尚、鄔金華などの名の13烈士を追悼し、彼らの死は決して無駄ではないことを述べた。代表らは三礼した後に花を供え、厳譔声が祭文を読んだ。5分間の黙祷後、不平等条約の撤廃、租界の回収、国民絶交、烈士の不死が叫ばれた。祭壇の右側には烈士の衣服と「血涙」の文字、左側には烈士の写真と「傑雄」の文字が掲げられ、下には何秉彝が着用していたスーツ、陳虞欽や陳兆長の長袍、身元不明の死者の衣服が置かれた。追悼会に20万人が参列した(『申報』1925年7月1日)。

1926年5月29日に行われた烈士公墓の除幕式には5,000人が参列した。翌日には、公共体育館で追悼式が行われた。10時に始まった式は、一、開会、二、奏楽、三、主席報告、四、3分間の黙祷、五、奏楽、六、電報紹介、七、講演、八、スローガン喚呼、九、奏楽、十、閉会と進行した(『民国日報』1926年5月30日)。その際、半球の上に鶏が乗った記念碑と屋根を持つ四角の記念碑が作られた。正面に湖南督軍の譚延闓(1880-1930)譚延闓に「来者勿忘」の文字、側面に25名の烈士名、裏面に碑文が刻まれた。記念碑の上の雄鶏は「雄鶏が鳴くと世界は明るくなる」ことを意味した[薛理勇(主編)1999:385]。上海でこのような西洋式の墓地が登場したのは、上海には19世紀から外国人墓地が存在し、1909年に中国人経営の共同墓地、薤露園(後、万国公墓と改名)が建てられた経緯があったためである。すなわち、芝生に墓石、東屋のある景観は上海の人々にとって珍しいものではなかったのである。

2.2 烈士の位置づけ

1925年7月に成立した国民政府は烈士褒揚の作業に取り掛かった。1928年10月、「戦没者・国民党烈士の遺族への賞恤、公墓と専用の祠の建設、戦傷者への優恤(陣亡将士、国民党先烈撫恤遺族建立公墓專祠並優恤残廢士兵)が提案された。そして、国民政

府は1931年7月11日、「褒揚条例」を公布したが、褒揚することを定めただけであり、具体的にどのように行うかという規定はなかった。1933年9月13日、内政部は記念祠を建設することを定めた「烈士附祠弁法」を公布し、1936年5月、軍事委員会によって交付された「各県設立忠烈祠弁法」で初めて「忠烈祠」という名称が登場した。こうして烈士とは、狭義には1920年代の北伐の犠牲者を指すものであり、広義には清末以来の革命運動の犠牲者を指すものと解釈された。

1940年9月20日、国民政府は「殉死者に対する祭祀と記念碑の建立に関する規則大綱」（抗敵殉難忠烈官民祠祀及建立紀念坊碑弁法大綱）と「忠烈祠の建設と管理に関する規則」（忠烈祠設立及保管弁法）を公布した（この規則は台湾の「忠烈祠祀弁法」へと引き継がれた）。烈士の対象は日中戦争と国共内戦の犠牲者にも拡大された。国民政府は地方に忠烈祠の建設を求めたものの、日中戦争が激化していたことから既存の廟を改築して忠烈祠にする程度で、新しく忠烈祠を造営するには至らなかった。

国民政府の烈士の定義が明確化される過程で、英雄として大々的に祀られたのが第33集団軍を率いた張自忠（1891-1940）であった。1940年5月16日、宜昌作戦（棗宜会戦）で死去した張自忠の神格化はすぐに始まった。日本軍は張自忠の遺体を丁重に埋葬し、「支那大将張自忠之墓」という墓石を建てた。その後、5月18日、第38師長の黄継綱によって張自忠の遺体は取り戻され重慶に運ばれた。国民政府は国葬級の葬儀を営み、蒋介石は「英烈千秋」（不滅の英雄）と称えた。1942年12月31日、張自忠を忠烈祠に祀ることを命じた。延安にも張自忠死去の知らせは伝わり、中国共産党もまた延安の礼堂において舞台に張自忠の大きな遺影を飾り、朱徳、毛沢東、周恩来は「尽国報国」（忠誠を尽くし国に報じる）、「取義成仁」（正義のために生命を犠牲にする）、「為国捐軀」（国のために命を捨てる）と揮毫し、王明や彭徳懷らも死者を追悼する句を読んだ。「張將軍が国のために殉死したことを全国人民は悲しみ悼む」と祭文を朱徳が読んだ際、追悼会は最高潮に達した〔邵先崇 2006: 128-129〕。

ウォルドロンは、張自忠の葬儀は様々な点で伝統的であったと指摘する。第一に葬儀が伝統的な手順に従っていたことである。その手順は、ワトソンが整理した中国伝統の9つの過程（死の告知、喪服の着用、遺体の沐浴、死者への供物、位牌の設置、金の支払い、鎮魂の曲の演奏、納棺、棺の移動）である。第二に英雄叙事詩（epic）の欠如である。西洋ではギリシアの英雄叙事詩以来、英雄は軍功によって称えられてきた。他方、中国では武人を埋葬する際にも文人としていかに優れていたかが強調され、戦闘そのものに言及されることは少ない〔Waldron 1996: 956〕。例えば、ウェリントンとワーテルローの戦いにおいてどのように戦ったかを語ることによって英雄として顕彰される、現在のワーテルローの丘における展示でも1815年6月18日におけるフランス軍と連合軍の戦闘の過程が詳細に映像やパネルなどで紹介される。中国における英雄叙事詩の欠如の事例を、ワンは「木蘭の詩」（年老いた父の代わりに娘のムーランが男装して従軍し、異

民族と戦って勝利し帰郷する物語)を取り上げ、「旦辞爺娘去 暮宿黄河辺(夜明けに父母を辞して去り、暮れに黄河の辺りに宿す)という出発の描写から、「將軍百戰死 壯年十年歸(將軍、百戰にして死に、戰士たちは十年にして歸る)と唐突に戦争が終わっていることから、実際の戦闘の描写が省略されていると指摘する。中国の伝統的文学では戦闘よりも戦争後の出来事に重点が置かれることが特徴であるという [Wang 1975: 33]。

軍功よりも両親や君主に対して忠実であったことから人々の崇拜の対象となる儒教的な観念は、民国期の烈士にも、その後の人民中国における烈士にも受け継がれた。人民政府は、漢族の祖先崇拜における祖先と子孫のつながりと、烈士と国家のつながりを同種のものとして、祖先と同じように烈士を崇拜することを奨励し、烈士を記念する行事となった伝統的な祖先祭祀である清明節を、烈士陵園への墓参りの日としたのである [Hung 2011: 217]。ただし、葬儀の簡素化や記念碑や記念建造物の社会主義化は着実に進められていった。1944年9月8日の張思徳(1915-1944)の追悼会は、中国共産党が進めた葬儀改革における転換点であり [ホワイト 1994: 314]、毛沢東は、陝西省安塞県で炭焼き釜が壊れて死亡した張思徳の追悼会で、「人民に奉仕する」(為人民服務)という演説を行った。また、1946年、飛行機事故で死亡した四八烈士の追悼の式典は、延安だけではなく、各地で開催された。1946年4月8日、共産党中央委員の王若飛(1896-1946)や中国共産党中央職工運動員会書記の鄧発(1906-1946)、『解放日報』主宰の秦邦憲(博古 1907-1946)、新四軍軍長の葉挺(1896-1946)らが重慶の国民党との会談を終えて搭乗した飛行機は延安へ戻る際に山西省黒茶山に墜落した。このとき、葉挺の妻の李秀文(1907-1946)と二人の子、黄斉生(1879-1946)、李少華(1917-1946)、黄曉庄(1924-1946)、魏万吉(1922-1946)、趙登俊(1922-1946)、高瓊(1930-1946)の13名とアメリカ人操縦士4名が死亡した。4月15日午後2時、延安大礼堂で四八烈士の追悼会が開催され、約2,000人の幹部が集まった(『抗戦日報』1946年4月21日)。

毛沢東は「殉難した烈士に哀悼の意を表す」と題して、不朽の英雄たちの死が中国人民に対して団結や共産党への理解を深める呼びかけであり、「死すとも栄光である」(雖死猶榮)と述べた(『抗戦日報』1946年4月19日)。王若飛らの遺体は黒茶山から延安へ運ばれ、4月19日、延安空港の近くで追悼式および公葬が盛大に行われた。開会式には全員が直立脱帽し、24発の甲砲が打たれた。遺族は、烈士たちの写真、花輪に囲まれた「為人民而死」と書かれた位牌、2羽の鶴、13名の烈士の棺の置かれた祭壇に上がり、霊前に花と酒を供え、焼香し、祭文を読んだ。公葬には朱徳、劉少奇、林伯渠、賀龍らが参列し、祭文を読んだ。公葬後、林伯渠は烈士の生前の業績を述べ、朱徳は烈士の死が中国人民にとって大きな損失であることを強調した(『抗戦日報』1946年4月23日)。こうした追悼大会のあり方は国民党の烈士追悼と大きく変わるものではなく、延安の農民たちの伝統的観念に沿ったものであった。烈士を村の廟に祀ることは農民のナショナル



写真7 王若飛墓（2008年8月，筆者撮影）。



写真8 雷鋒記念館（2011年8月，筆者撮影）。

ズムを喚起させたため、村での追悼大会が積極的に奨励されたという〔丸田 2013: 223〕。

烈士を埋葬するために作られた四八烈士陵园は、共産党による初期の本格的な烈士陵园である。中央には毛沢東によって「为人民而死雖死犹」（人民のための死はたとえ死すとも光栄である）と刻まれた高さ16.46mの大理石の塔がある。この高さは1946年を表す。その背後に烈士墓が3層に並び、中央に王若飛の墓が置かれた（写真7）。烈士陵园は1947年の国民革命軍の胡宗南（1896-1960）による延安進行に際して破壊されたため、1957年、改修された。そのとき、延安で病死した張浩（林育英 1897-1942）と閻向応（1907-1946）らもあわせて埋葬され、烈士陵园としての威信をさらに高めることになった。

3 社会主義期の烈士陵园：社会主義リアリズムの導入

3.1 公式な烈士の顕彰

1950年10月15日、内務部が公布した「革命烈士に関する解釈」は、辛亥革命（1911）、北伐（1924-1927）、第一次国共内戦（1927-1937）、抗日戦争（1937-1945）、第二次国共内戦（1946-1949）で死亡した人々を烈士とした（『人民日報』1950年10月15日）。1950年、中国政府は烈士の身分を正式に規定し、烈属（烈士の家族）に対する優遇措置、地方政府に対して烈士陵园を建設すること、烈士に関わる遺品や資料を収集し、記念館に保存することを定めた。

1950年代、烈士の定義と同時に烈士を顕彰する方法として社会主義リアリズムが導入された。1933年、スターリンがソ連公式の芸術様式とした社会主義リアリズムは、1930年代、周揚（1908-1989）や胡風（1902-1985）らによって文学理論として紹介されてきた。1942年の延安講話から社会主義リアリズムを基本とする芸術様式は「毛沢東時代様式」と呼ばれ、毛沢東が死去する1976年まで続いた。この時期、「毛沢東と直接関係のない英雄は決まって名誉を損なわれた」〔Waldron 1996: 973〕ことが特徴である。劉胡

蘭は毛沢東が「生きて偉大、死して栄光である」(生的偉大、死的光榮)と称えたこと、雷鋒は「雷鋒に学べ」のキャンペーンで称えたことで全国規模の烈士となり、顕彰施設も建設された(写真8)。

国共内戦を勝利した中国共産党は、中華人民共和国建国宣言の前日の1949年9月30日、中国人民政治協商会議第一回会議において、革命烈士のために天安門広場に記念碑を建設することを定めた。同日午後6時、毛沢東は天安門広場で定礎式を行った。記念碑着工の1952年に決定していたのは記念碑が直方体であること、正面に「人民英雄永垂不朽」(人民英雄は永遠に不滅である)という毛沢東の題字を刻むことであった。伝統的な宮殿と石碑の建築様式に基づき当初は南面が正面とされたが、着工から一年後、北面が正面となった。その理由は北京の南北から東西への主軸道路の変化であった。辛亥革命以前、故宮までの主軸は永定門を通過して正陽門、中華門を経て天安門へ至るという南北線であったが、天安門前を東西に貫く長安街が主要道路となり、さらに1949年以後、正陽門と前門の閉鎖で南北線が遮断されたため、天安門と長安街から見て記念碑の正面は北側が望ましいとされた。

人民英雄記念碑興建委員会では、北京市長の彭真(1902-1997)が主任に、鄭振鐸(1898-1958)と梁思成(1901-1972)が副主任に就任した。主要設計者である梁思成は、1924年から1928年までペンシルバニア大学とハーバード大学で建築を学んだことから西欧建築に造詣が深く、伝統的な石碑と西洋的な記念碑建築をいかに融合させるかに注意を払った。彫刻家たちが主張した碑頂に兵士像を載せる西洋的なデザインは支持されたものの、梁思成と彭真は彫像を用いると人民英雄記念という主題があいまいになるとして、結局、廡殿頂(屋根型の碑頂)が採用された。題字がメインであり、革命のレリーフや彫刻がサブであるという記念碑のあり方は、その後の中国の革命記念碑のモデルとなり、スターリンの社会主義リアリズムの影響を受けたものの、中国特有の記念碑の様式を生み出した。

ソ連の影響を受けた1950年代、江豊(1910-1982)は、芸術分野における彫刻の遅れを指摘し、記念碑建築が彫刻家によって装飾されるべきであり、多くの英雄たちの彫像が作られるべきであることを述べた。その先駆けとなったのは東北部にソ連が建てた数々の記念碑と墓であった。移設あるいは撤去された記念碑もあり、また、ソ連が資料を残していかなかったことから、記念碑の正確な数はわかっていないが、最近の研究では100ほどの記念碑と墓が存在したことが確認されている。

3.2 東北部の烈士陵園

人民英雄記念碑で却下された碑頂に兵士像を載せたデザインは、ハルビンやチチハルなどのソ連紅軍烈士記念塔で見られる。旅順のソ連烈士陵園の入り口にはかつて大連の人民広場(旧スターリン広場)にあった盧鴻基(1910-1985)設計のソ連烈士記念塔があ



写真9 旅順陣歿露兵之碑 (2011年8月, 筆者撮影)。



写真10 ソ連軍烈士記念塔 (2011年8月, 筆者撮影)。

る。これは、碑頂に置かれたデザインではないが、兵士像と記念碑の組み合わせである。

旅順のソ連烈士陵园は中国最大規模の外国人墓地で、建設は1897年末に始まった。もともとは、ロシア人墓地（沙俄公墓）として建設され、ロシア人とユダヤ人を埋葬した。19世紀末のロシアではユダヤ人迫害が強まっていたため、ユダヤ人はハルビンや旅順へ移住した。日露戦争後、旅順を占領した日本は1908年、この露国墓地として墓地の建設を引き継ぎ、14,873人のロシア兵を埋葬し、さらに、露国忠魂碑と旅順陣歿露兵之碑を建設した（写真9）。「祖国とロシア皇帝、旅順口を守るために犠牲になったロシアの兵士のために」と刻まれた露国忠魂碑は当時の墓地の中心であった。1945年8月9日、ソ連が東北部に進軍した後、露国墓地はソ連烈士陵园となり、1945年から1955年に死亡したソ連兵が埋葬された。1955年にソ連軍烈士記念塔が建てられた場所に中心が移った。銅版には、「ソ連と中国の人民の自由と幸福のために犠牲になった烈士たちは永遠に不滅である」と中国語とロシア語で刻まれた。塔の先端には、オリーブの枝が絡んだ金の星が掲げられ、塔の前には、銃と旗を掲げた陸海軍のソ連兵が膝をついて祈りを捧げる一対の銅像が置かれた（写真10）。

ソ連烈士陵园の北側に1951年、大連市旅順八一烈士陵园の建設が決まった。竣工したのは文革終了後で、367名の烈士が埋葬された。その中心となったのは、金伯陽（1907-1933）である。旅順出身の金伯陽は、共青团（中国共産主義青年団）の加入を経て、1929年に中国共産党に入団した。1933年9月に楊靖宇を中心に成立した東北人民革命軍第一軍独立師（後に東北抗日聯軍に改編）に参加し、同年11月15日、26歳で死去した。1981年に埋葬された際には民族英雄という肩書であったが、2014年9月1日、民政部が発表した「第一回著名な抗日英烈と英雄のリスト」の300名のうちの一人となった。英雄リストの第二回目は2015年8月24日に発表され、600名が新たにリストに加わった。これより前の2009年9月10日、宣伝部を中心とする11部門は100名の中国成立までの模範的英雄と100名の中国成立後の感動を与えた人物のリストを発表した。なお、このリストの中に毛沢東や王若飛、李兆麟、趙一曼、張自忠、朱瑞、楊靖宇、董存瑞らは入ってい

るが、金伯陽は入っていない。

瀋陽の抗美援朝烈士陵园は、1950年から1953年の朝鮮戦争の犠牲者を埋葬するために、1951年、瀋陽の北陵（ホントイジの墓）の西側に建設され、北陵烈士陵园と呼ばれていた。この陵园は董必武が揮毫した「抗美援朝烈士英霊永垂不朽」という題字が刻まれた記念碑とその前に広がる空間の構成にソ連の影響が顕著に見られる（写真10）。黄花岗烈士墓苑のような亭や龍の彫刻を施した龍柱、池と石橋のような伝統的な建造物はなく、簡素な空間にリアリズム彫刻が置かれ、現代的な資料館が立つ。数少ない伝統的な要素は、記念碑の下にはめ込まれた郭沫若による揮毫と墓の土饅頭の形式である。墓は記念碑の北側に広がり、朝鮮戦争の特級戦闘英雄である黄継光と楊根思など、123名が埋葬されている。

陵园に入った東側にソ連烈士陵园があり、記念広場の周囲にはレリーフが置かれている。元々、ソ連軍陵园は瀋陽の西塔に1945年11月にソ連軍烈士墓（蘇軍烈士墓）として建設され、155名が埋葬されたが、1999年8月に抗美援朝烈士陵园に移築され、将校の墓は花崗岩に名前が刻まれ、二等兵の墓はコンクリートで作られた四角の枠の中に墓石が埋め込まれた。2006年11月20日、瀋陽駅前にあったソ連紅軍将士陣亡記念碑（通称、タンク碑）が移築され、入口の門が改築された。1950年代、ソ連はハルビン駅や瀋陽駅前にいくつか記念碑を建てた。文字は碑側ではなく基本的に台座に刻まれた。例えば、ハルビン駅前にかつてあったソ連紅軍解放東北記念碑（1945年11月23日落成）には以下のような文字が刻まれていた。

ソビエト社会主義共和国連盟の独立のために戦争で犠牲になった英雄たちは永遠に不滅である。中国の自由と独立のために東北解放戦線で戦い犠牲になったソ連の英雄たちは永遠に不滅である。ソ連指揮部は日本帝国主義と戦い犠牲になった赤軍戦士を記念してこの碑を建設し、さらにソ連の偉大な10月社会主義革命28周年を記念して除幕式を行う。

ハルビンや長春のソ連赤軍烈士記念塔のようにロータリーに現存するものもあるが、近年の交通量の増加や高層ビル群の建設、地下鉄工事の影響により、建立された当時の高く聳える記念碑が織りなす社会主義的な景観は現在ではうかがい知ることは難しい。

ソ連記念碑が最も多く残るのは黒竜江省である。19世紀末に東清鉄道が開通したハルビンには多数のロシア人やユダヤ人が居住し、アールヌーヴォーや中華バロック様式（中西折衷様式）の建物が並んだ。ロシア人墓地も作られ、それは「日本人の考えるような墓地とは全然イメージが異なり、花と大理石の彫刻に飾られた一種の公園のような美しさを持っていた」[越澤 2004: 49] という。初めての烈士記念館として1948年10月10日に開館した東北烈士記念館は、鉄道中央図書館として1929年に建設されたルネサンス様式の建物である。実際には図書館として使われることはなく、1933年、日本軍がハルビン特別警察庁として占有した。女性烈士として知られる趙一曼（1905-1936）はここで拷

間を受けたことから、現在では展示の中心人物の一人となっている。その他には、抗日戦争で活躍した李兆麟（1910-1946）や楊靖宇（1905-1940）、趙尚志（1908-1942）、解放戦争で活躍した朱瑞（1904-1948）や董存瑞（1929-1948）、楊子榮（1917-1947）などの写真があり、生い立ちや最期が紹介されている。

ハルビン烈士陵园もまた、西洋的な建築様式に強く影響を受けている。ここに最初に埋葬されたのは、「砲兵の父」と呼ばれる東北人民解放軍砲兵司令の朱瑞（1905-1948）である。朱瑞が死んだ遼瀋戦役は国共内戦の三大戦役の一つで、1948年9月12日に始まり、錦州や長春、瀋陽、栄口などで国民党軍を破り、11月2日に終わった。その後、人民解放軍は淮海戦役と平津戦役を経て、1949年1月に北京に入城した。遼瀋戦役の終盤の1948年11月1日、朱瑞の棺は当時、東北烈士陵园と呼ばれた場所に埋葬された。1952年、東北烈士陵园はハルビン市民政局の管理下に置かれ、ハルビン烈士陵园と改名した。ハルビン烈士陵园は、朱瑞の墓を中心として18基の革命烈士の墓、革命烈士記念館、革命烈士記念碑林、無名戦士のレリーフ、烈士のレリーフ、英名録碑から構成される西洋式の陵园である。この陵园は、抗日戦争から国共内戦、朝鮮戦争、社会主義建設期に犠牲になった241名の烈士を祀る。

1998年にハルビン烈士陵园に作られた烈士記念碑林は毛沢東などの碑を並べた回廊であり、現在、多くの烈士陵园に見られる。碑林は、西安碑林博物館のように様々な石碑や墓碑を集めた場所を指す。上海の龍華烈士陵园や井岡山烈士陵园などには黒い石に文人らの詩を刻んだ大量の碑が掲げられている。これらは1980年代以降に修復される際に作られたものが多く、一種の流行でもあると考えられるが、文革終了後、各地で伝統文化が復興する中で伝統的な碑文化も復興していると見なすほうが妥当であろう。文革期、烈士陵园も被害を受け、例えば黄花岗烈士墓苑の「浩気長存」という文字は覆い隠された。伝統芸術における書の優位性に代わって、プロパガンダ・ポスター（宣伝画）や銅像などの視覚イメージが突出するようになるのはこの時期においてであった [Jiang 2007]。19世紀末、上海の租界に登場した偉人顕彰のための彫像は1930年代から各都市で烈士顕彰のための媒体となった。やがて、1950年代に本格的にソ連から彫像制作の技術や観念が導入され、広場や学校に烈士顕彰の彫像が作られていった。墓においても、墓石と遺影や人物の彫像の組み合わせが普及した。書（文字）と造形（彫像）のバランスがどのように変化したかに着目しつつ、南部（国民党）の記念碑と東北部（共産党）の記念碑について比較したい。

4 比較検討—文字から造形への移行

国民党の烈士顕彰の様式を受け継ぐ黄花岗烈士陵园は、伝統的な祖先祭祀に1920年代に導入された西洋式の建築様式が合わさった様式を持つ。他方、北部の烈士陵园はソ連

の影響を受けた様式を持つ。北部・共産党の烈士顕彰と南部・国民党の烈士顕彰の違いでもあり、単純に、寒冷な北部と亜熱帯の南部という気候・植生の違いでもある。ただし、文字を中心とする記念碑から文字プラス造形の記念碑への移行は1930年代ころから起こっている。この移行を考える上で重要な点は、黄花崗墓苑や五卅烈士墓が整備されていった1920年代後半、南京に孫文の墓である中山陵が建設されたことである。孫文の葬儀を国葬とするか議論はあったものの結局、国葬扱いになり、1916年に公布された国葬法に基づいて国葬が営まれた。各地で孫文追悼大会が開催されたが、その際に孫文の遺影が祭壇に置かれた。そして、遺体は南京郊外の紫禁山に1926年から1929年にかけて建設された中山陵に埋葬され、宮殿造りの建物の中に孫文の座像が置かれた。その座像は、ワシントンDCのリンカーン記念堂と類似していることが指摘されている [ウー2015: 183]。神殿風の建造物の中のリンカーンの座像は古代ギリシアのゼウス像を模しているもので、その当時、現存した人物を神格化したような記念碑は近代ヨーロッパにはほとんど見られなかった。この様式は南京と台北の孫文像、北京の毛主席記念堂、台北の中正記念堂（蒋介石記念堂）に用いられた。

黄埔軍校の孫総理記念碑の側面に多くの文字が刻まれている。この様式は北部のソ連式の記念碑には見られない。この写真は斜め後ろから撮影したものであるが、中山公園の八掛山にあり、正面から見辛い造りになっている。スターリン様式のように、記念碑の前には広い空間があるが、それは記念碑を見上げるため、式典を行うためのものである。1930年代の式典は、上海体育館における五卅烈士の追悼大会や延安大礼堂における四八烈士の追悼大会のように屋内で最初に行われていた。広い空間と記念碑は必ずしもセットである必要はなかった。例えば、1933年、蔡元培の発案で紹興に建立された秋瑾記念碑は秋瑾が1907年に処刑された場所であるが、周囲にはそれほど広い空間はない。現在では交通量が多く、時折、車やバイクが記念碑に衝突する事故が起こっている。1997年に秋瑾記念碑の近くに秋瑾の白い像と小さな広場が建てられ、花輪などはこちらに供えられる。

彫像（銅像）の広がり死者へのイメージの変化と密接に関わる。特に、横死した人物が「鬼」（幽霊）になるという中国の民間信仰は辛亥革命後も根強く残っていた。民国初期、広東政府は七十二烈士を革命の殉死者として位置づけようとしたものの、実際のところ、人々は黄花崗武装蜂起の犠牲者を「鬼」と見なし、災いをもたらすものとして恐れていた。例えば、10代の少女が七十二烈士の邪悪な霊に憑りつかれた広まったことなどが新聞に掲載され、七十二烈士に対する恐れから人々は果物や酒、生花を供え続けた [Ho 2004: 118]。芝生に墓石が整然と並ぶ公園墓地は、瘴気漂う墓地の雰囲気は払拭し、横死者のイメージも幾分か変えることができたと考えられる。さらに、墓地にある死者の彫像は死者を非宗教的に想起することを可能にした。位牌に代わって彫像そのものが崇拜の対象となり、秋瑾像のように供物が置かれることも珍しくない。革命資料館

の中にある毛沢東像の前には供物が捧げられ、清明節の際には彫像館における烈士以外の偉人像にも供物が捧げられる。魯迅公園、李大釗陵園、宋慶齡陵園、雷鋒記念館（陵園）など、これらはいずれも墓と人物の像（銅像）が組み合わさっている。墓、彫像、広場から成る烈士陵园の景観は、死者のイメージおよび葬儀の変化、近代的な広場や公園という公共空間の登場という過程を通して作られていったのである。

5 おわりに—烈士の再定義

烈士の概念は儒教的な祖先と近代的な殉死者の間を常に揺れ動いてきたことがわかる。2011年の「烈士褒揚条約」公布以降、清明節における烈士祭祀の報道が増え、一層の伝統回帰的な様相が見られる。それと同時に烈士記念施設や墓が「紅色資源」と呼ばれ、観光資源や一種の文化財と認識されるようになり、散在する烈士記念施設と墓の管理が不十分で破損が進んでいることが問題となってきた。2011年の時点では約7,000の烈士記念施設100万基の烈士墓が散逸していることが報告されている。翌年の清明節の際には、全国に散在する30万の烈士墓と2,000の烈士記念施設の移設と修理を実施することが発表された。この年の統計では、烈士記念施設の保護単位として登録されているのは4,151か所、記念施設は2.4万基、烈士墓は75万基であるが、そのうち分散している記念施設は1.2万基、烈士墓は61万基であるという。こうして散逸する烈士墓に対して政府は一基あたり5,000元、記念施設に対して20万円の補助金を出すことを定めた。

2011年4月1日の『人民日報』には、寧夏大学政法学院42名の大学生が銀川市英烈革命烈士記念碑の前に花輪をささげる写真が掲載され、4月6日には北京市公安局が新設の首都公安英烈祭奠園の落成式の写真が掲載された。写真には花輪を持つ二人の警官が「忠誠」と刻まれた記念碑の前を歩く姿が映っている。2014年4月3日には黒龍江省牡丹市の八女投稿投江記念群彫の前で五星紅旗を持っている4人の女性の写真が載った。こうした写真にはいずれも記念碑の前で献花する若い人々が映っている。これは清明節や烈士節に限らず、2004年に開館した鄧小平記念館の前で鄧小平の銅像の前で胡錦濤国家主席が映っている。また、2014年の烈士節では習近平国家主席が中心となった写真である（図1）。

民国期の烈士顕彰式典に関する『申報』や『新華日報』『解放日報』などの写真を見ると不鮮明なところはあるにしても、あくまでも写真の主役は記念碑であり、記事の中心は式典のプロセスであった。こうした式典の記事に関して、知識エリート層であった民国期の新聞記者と読者の主眼は、式典が滞りなく行われることに置かれ、一般の人々が式典をどのように見学したかは関心が注がれなかったためであるという [Harrison 2000: 26]。近年の記事における主眼は、烈士に献花する領導や子供たちであり、どのように烈士顕彰式典を見るべきか語られる。極めて形式化された献花する人々の動作は、無名兵



图1 『人民日报』第1面（2014年10月1日）

士の墓における定時の衛兵交代式を彷彿とさせる。衛兵の交代は衛兵の疲労をとるといふ物理的な理由だけではなく、衛兵が交代することでその場が常に清潔に保たれ、言い換えれば、聖なる空間が保たれるのである。さらに、衛兵交代式は観光客にとって重要なイベントであり、それを見るために人々が集まってくる。他方、烈士陵园は墓であり、その性質上、頻繁に人が訪れる場所ではないゆえに、簡単に廃れ、社会的に意味のある景観ではなくなっていく。実際、建設から数十年たった現在、管理が行き届くものは数少なく、烈士陵园の多くは修復と管理が必要である。修復終了後に行われる式典を通して、烈士陵园は再び神聖な場所としての意味を吹き返す。こうして、烈士陵园の景観は社会的意義が再確認され、資源化されるのである。

参考文献

〈日本語〉

ウー、ホン

2015 『北京をつくりなおす—政治空間としての天安門広場』 中野美代子・大谷通順訳、東京：国書刊行会。

王曉葵

2005 「20世紀中国の記念碑文化—広州の革命記念碑を中心に」 若尾祐司・羽賀祥二（編）『記録と記憶の比較文化史—史誌・記念碑・郷土』 pp. 234-270, 名古屋：名古屋大学出版会。

小野寺史郎

2011 『国旗・国家・国慶—ナショナリズムとシンボルの中国近代史』 東京：東京大学出版会。

川口幸大

- 2013 「現代中国における宗教と信仰の諸相」川口幸大・瀬川昌久（編）『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』pp. 1-19, 京都：昭和田。

越澤明

- 2004 『哈爾濱（はるびん）の都市計画』東京：ちくま学芸文庫。

高山陽子

- 2014 「聖地の記憶—旅順の事例から」『国際関係紀要』21: 137-166。
 2015 「英雄の表象—中国の烈士陵园を中心に」『地域研究』14(2): 43-58。
 2016 「文化資源としての戦跡—旅順の事例を中心に」『中国民族文化の資源化とポリティクス』pp. 339-361, 東京：風響社。

田村和彦

- 2014 「近現代中国における“正しい”葬儀の形成と揺らぎ—二つの“聖なる天蓋”とその後の展開」『中国21』41: 175-202。

武小燕

- 2013 『改革開放後中国の愛国主義教育—社会の近代化と道徳の機能をめぐって』岡山：大学教育出版。

ホワイト, マーティン・K

- 1994 「中華人民共和国における死」ジェームズ・L・ワトソン&エブリン・S・ロウスキ（編）『中国の死の儀礼』pp. 307-332, 東京：平凡社。

丸田孝志

- 2013 『革命の儀礼—中国共産党根拠地の政治動員と民俗』東京：汲古書院。

吉澤誠一郎

- 2003 『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』東京：岩波書店。

〈中国語文献〉

遲海波（編）

- 2011 『紅色文化資源』長春：吉林人民出版社。

陳蘊茜・吳敏

- 2007 「殖民主義影響下の上海公墓変遷」蘇州大学社会学院（編）『晚清国家与社会』北京：社会科学文献出版社。

《広州市黄花崗公園》編

- 2011 『黄華皓月—黄花崗七十二烈士墓百年図録』広州：広東人民出版社。

賴德霖

- 2011 『中国建築革命—民國早期的禮制建築』臺北：博雅書屋。

薛理勇（主編）

- 1999 『上海掌故辞典』上海：上海辞書出版社。

田志和（編）

- 2010 『永恒的懷念—中国土地上的蘇聯紅軍碑塔陵园』大連：大連出版社。

邵先崇

- 2006 『近代中国の新式婚葬』北京：人民文学出版社。

張世瑛

- 2010 「国民政府对抗戦忠烈事蹟敵調査与紀念」『国史館館刊』26: 1-46。

《中国紅色旅游地图集》編纂委員会

2014 『中国紅色旅游地图集』長沙：湖南地图出版社。

〈英語文献〉

Harrison, Henrietta

1998 Martyrs and Militarism in Early Republican China. *Twentieth-Century China* 23(2): 41-70.

2000 *The Making of the Republican Citizen: Political Ceremonies and Symbols in China, 1911-1929*. Cambridge: Oxford University Press.

Ho, Virgil Kit-yiu

2004 Martyrs or Ghosts? A Short Cultural History of a Tomb in Revolutionary Canton, 1911-1970. *East Asian History* 27: 99-138.

Hung, Chang-tai

2011 *Mao's New World: Political Culture in the Early People's Republic*. Ithaca: Cornell University Press.

Jiang, Jiehong (ed.)

2007 *Burden or Legacy: From the Chinese Cultural Revolution to Contemporary Art*, pp. 1-32. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Waldron, Arthur

1996 China's New Remembering of World War II : The Case of Zhang Zizhong. *Modern Asian Studies* 30(4): 945-978.

Wang C. H.

1975 Towards Defining a Chinese Heroism. *Journal of the American Oriental Society* 95(1): 25-35.

〈新聞〉

「各界多主張孫先生用国民葬」『民国日報』（1925年3月16日）

「今日之五卅紀念」『民国日報』（1926年5月30日）

「關於滬慘案之昨訊」『申報』（1925年7月1日）

「紀念“五卅”」『新華日報（華北版）』（1940年4月29日）

「中中共委王若飛秦邦憲等同志遇難」『抗戰日報』（1946年4月13日）

「今日舉行公祭」『抗戰日報』（1946年4月17日）

「向“四八”被難烈士致哀」『抗戰日報』（1946年4月19日）

「隆重祭悼遇難諸烈士」『抗戰日報』（1946年4月21日）

「隆重公葬王秦所烈士」『抗戰日報』（1946年4月23日）

「關於革命烈士的解釋」『人民日報』（1950年10月15日）

「我國加強零散烈士紀念施設建設管理保護」『人民日報』（2011年4月1日）

「永遠不能忘記-清明期間各界群眾緬懷英烈」『人民日報』（2011年4月5日）

「緬懷先賢 悼念英烈」『人民日報』（2011年4月6日）

「5.2億人次參加清明祭掃」『人民日報』（2012年4月5日）

「烈士紀念日向人民英雄敬獻花籃儀式在京隆重舉行」『人民日報』（2014年10月1日）